

# かぐらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

## 第 78 号

平成 5 年 12 月 25 日

編集 旭川医科大学  
厚生補導委員会

発行 旭川医科大学教務部学生課



開学20周年記念式典式辞……………学	長… 2	卒業後10年に思うこと……………錫谷	達夫…14
旭川医科大学20周年記念フォーラム		10年目に思うこと……………伴	俊明…15
寒さと暮らし―「快適」旭川―(要約)……………	3	解剖学実習を終えて……………加藤	裕司…16
開学20周年に思う「20年ふた昔」…藤澤	仁… 7	解剖学実習を終えて……………角谷	諭美…16
開学20周年に思う―道北の脳神経外科 ……米増	祐吉… 8	研究室紹介……………赤間	保之…17
開学20周年に思う―20年を振り返る ……内田	倅喜… 9	研究室紹介……………立野	裕幸…17
創設期の旭川医科大学……………	10	解剖体慰霊式……………	18
教授に昇任して―第二の故郷となる旭川の地で― ……油野	民雄…12	公開講座……………	18
助教授に昇任して……………千葉	茂…13	教官の異動……………	18
助教授に昇任して……………山下	裕久…13	窓 外……………	18



## 開学20周年記念式典式辞

学長 清水 哲也

本日ここに、文部省はじめ多数のご来賓をお迎えし、開学20周年記念式典を挙げてまいりましたことは、私ども教職員一同の大きなよろこびとするところでございます。

かえりみますと、本道の医師不足という医療事情に対処するため、文部省のご指導を頂きつつ、開学に至るまでには、北海道知事、旭川市長、本道ご出身の国会議員の方々をはじめ、本日ご来賓としてご出席を仰いでおります、関係各位の筆舌につくせぬご努力がございました。

昭和48年11月5日に1期生、100名を入学させた本学も、20周年記念式典を迎えるに至りました。

いわば、成人の日を迎えたわけでございますが、成人に達した私どもの大学に今、求められておりますことは、「大学の冬の時代」といわれている、厳しい現実のなかでの生き残りをかけてのストラテジーであります。

大学審議会の三次に亘る答申でも明らかなように、本学も闊達で多様な発展を遂げるよう教育の基本的な枠組みを定めている諸基準の大綱化と自らの責任において教育研究診療の不断の改善を計るべく、自己点検・評価のシステムを導入し、そのための委員会を発足させ、諸規程を制定したのみにとどまらず、現状分析のための「年報」を昭和63年度以来、2年ごとに定期的に発行し既に第3号までの発刊を終り、本年は第4号の編集準備が進捗中で、各講座・学科目ごとに記載されている研究業績は、その研究活動の実態を如実に物語っております。

また本学における教育へのアクセスの多様化や授業の履習形態の柔軟化を図るため選択制や統合科目を大巾に取り入れた新しいカリキュラムの導入を開始し、多様な学習機会の提供に努めております。

さらには地域社会との交流を重視し、本年からは北海道知事、旭川市長を本学参与として迎え、公開講座を本学における重点施策の一環と位置づけ、毎回、250余名の受講者を対象に、1シリーズ10回の

展開を試み、本年は10月26日に終了をしております。

さらには本学における自助努力の一つとして、北海道の医育機関としては、はじめて寄附講座を発足させ、客員教授を中軸として、支援講座の協力の下に、現在、活発な研究活動を行っております。

卒業生は平成4年度卒の第15期生を加えて既に1,601名を数え、そのおおよそ7割は道内各地で医学の研究に、はたまた医療の第一線で活躍中であり、既に第1期生のなかから、2名の国立大学教授の誕生をみております。

おわりに急激な人口動態変化にともなう超高齢化社会に対応可能な医科大学として、ただ単に、医師の養成のみにとどまらず、ICN（感染コントロールナース）やGN（高令者看護専門ナース）などの高次機能を有する看護専門職の教育などを目的とした医学部看護学科の1日も早い実現を目ざして、大学の総力を挙げて懸命の努力を続けております現状をご報告し、併せて文部省はじめ、本日ご列席のご来賓各位のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げまして、式辞と致します。

平成5年11月5日



# 旭川医科大学開学20周年記念フォーラム 寒さと暮らし —「快適」旭川— (要約)

寒さと「からだ」 旭川医科大学教授 黒島 農 汎  
旭川の気象一風のない都市 旭川地方気象台長 菊地 弘 明  
アルプスと「風」 国際的アルピニスト(医師) 今井 通 子  
「断熱性」と「換気性」 寒地住宅研究者(光塩学園女子短期大学教授) 魚住 麗 子  
司会 森田 美由紀

## 司会者 森 田

ただいまから、旭川医科大学開学20周年記念フォーラムを開催いたします。

テーマは、寒さと暮らし—「快適」旭川—でございます。医学、気象そして住宅などにつきまして、4人の専門家の方々に寒さについてたっぷりとお話していただけたと思います。私は、道産子でして、5年間のNHK札幌放送局に勤務中、道北の地域医療の中核として、そして最新の医療の発信基地としての旭川医科大学の取材を通してたいへんお世話になり、また、旭川の厳しい寒さの中の温かさというのを常々感じておりました。言葉の上では少々矛盾する“厳寒の雪の中の暖かさ”、その秘密は何なのか、今日のこのフォーラムを通して知ることが出来ればと、私自身楽しみにしております。それでは、旭川医科大学学長清水哲也からご挨拶を申し上げます。



## 清水学長

皆様の熱き思いで誘致をしていただきました旭川医科大学も、本年度20周年を迎えるに至りました。卒業生の数も1,601名に達しております。これも市民、地域の皆様のおかげで協力ご理解のおかげと、厚くお礼申し上げます。本学は皆様とのふれあいを大切にしており、毎年定期的に行われる公開講座も、本日の記念講演会もその一貫と位置づけております。本日は、4人の講師の皆様と、NHKの森田さんに司会役をお願いいたしました。お忙しいところ、皆様快くご承諾くださいました。

厚くお礼申し上げます。この講演会の内容が、寒さ厳しい、しかしほのぼのとした温かみのあるこの旭川の生活を送るようすの一端になることを心から祈念して、ご挨拶にかえさせていただきます。

## 司会 森 田

黒島先生は、現在旭川医科大学の教授として、環境生理学、特に寒さ、暑さの温度環境に対する適応の仕組みを研究していらっしゃいます。



## 講演I 黒 島 “寒さはビタミン”

からだにとって“寒さ”とはどのような意味をもっているのでしょうか。

寒さとからだの関係を示すキーワードがあります。それは、『やわ肌の熱き血潮にふれもみで……』という歌のやわ肌をつくっている熱き血潮のもとになっている体温です。私達が生きていくにはエネルギーが必要です。食べ物の化学的なエネルギーを体の中で取り出し、それを使って生きているのです。その時約37℃という体温が、一番適切に必要なのです。従って、からだは恒温性の化学的なエンジンといえます。“寒さ”は熱を奪い体温を下げる働きをする挑戦者と見なせます。しかし、それに対し積極的に戦い応戦するために、我々は体温調節という仕組みを持っています。この仕組みのおかげで変化する地球の環境温度の中で活動することができると同時に、この仕組みが我々が地球上で生きていくための必須の特性であるということになります。そして、この体温調節の能力を維持し遅くするためには、“適当な寒さの刺激”が必要となる訳です。



体温調節の仕組みは、熱産生と熱放散のバランスによるのであって、その中枢は脳の中の視床下部にあります。そこには長い進化の過程で遺伝子の中に組み込まれた、体温を37℃に保とうとするプログラムが組み込まれています。一方、37℃からずれたかどうかをモニターする装置が、脳の中と皮膚にあります。これらのモニターからの温度情報を体温調節中枢が受取り、体温を調節するのです。このような私達の存在を可能にした体温調節能力というのは、何億年という年月に及ぶ地球環境のもと、挑戦と応戦のドラマの中で育まれて、生物としての我々の進化の重要な要素になってきたと考えられます。ですから、その意義を忘れないで、この遺産を大切に引き継ぐことが、これからヒトが地球上で最も成功した生物として生き続けることに繋がるのだと私は考えています。

旧約聖書の中に、神のノアへの契約の一節があります。神はノアに、『私は決して再びすべての生き物を滅ぼすことはしない。地がある限り暑さも寒さもやむことはないだろう』と書いてあります。人類は、歴史を語るができるようになってからずっと、暑さ寒さという温度環境がある限りヒトは滅びることはない、このような温度環境があるからこそ栄えるのだということを認識していたのではないかと、この一節から読み取れるのではないのでしょうか。

私も今日は生理学の立場から、寒さはビタミンである、寒さがある限りヒトは生存し、繁栄し続けるだろうということを予言して、私の話を終わらせていただきます。

司会 森田

旭川気象台長の菊地弘明さんです。先生には、毎日の暮らしに欠かせない天気予報で大変お世話になっております。先生は、また、気象変動、都市気候について熱心に研究を続けておられます。今年は、全国的に冷害の被害が広がっておりますけれども、今は冷害についての研究も深めていらっしゃるということです。



## 講演Ⅱ 菊池 “風が弱ければ寒さは和らぐ”

私の今日のテーマは『寒さと暮らしのなかで風のない都市(まち)』で、これは旭川をびったり言い当てている非常にいい言葉だと思います。旭川の気象の特徴のひとつは、夏と冬の温度が非常に大きい、それから風が特に冬に弱い、そして気温が低いわりには、非常に雪が多いということです。また、大雨や大風などの気象災害が非常に少ないのも大きな特徴です。

旭川の気象を世界的にみると、まず、地理的位置は、北緯43度46分、東経142度22分、標高112mで、同緯度に近い都市に、ミュンヘン(北緯48度)ローマ(北緯41度)、中国の瀋陽(北緯48度)があります。まず、気温について見てみます。旭川の冬の平均気温は-6.9度、札幌-3.6度、網走-5.5度です。北海道と同緯度のヨーロッパは南欧で、とても暖かい所です。どうして北海道がこんなに寒いのか、それは地理的位置の問題です。空気は西から動いてきますから、ユーラシア大陸の東側にある北海道は世界的に見ても、随分気温が下がり、その中でも旭川は一等群を抜いているのです。北海道にある162箇所のアメダスの最近10年間のデータでは、北海道は-30度以下になり得ることがわかります。しかし、気温が低いからといって、決して住みにくい訳ではありません。旭川はわりと住みやすいです。それは、風が非常に弱いからです。

一日の最大風速が10m/s以上吹いた日数を道内でみますと一番が寿都(180日)、その次が浦河(128日)、留萌もけっこう吹きます。内陸に行くにしたがって少なくなり、旭川ではたったの0.7日です。従って、私達のからだに作用する温度、体感温度、でみますと旭川は他の地域に比べて暮らしやすいことがわかります。風が弱いとエネルギー源としての風力の利用がむづかしい、大気汚染物質が滞留しやすいなどのマイナス面がありますが、農作物の倒伏がない、ビニールハウスに及ぼす害がないなど、プラスの面がたくさんあります。旭川は農業の町ですから、非常に有利です。

旭川は雪の多い町です。しかも、旭川の最低気温は-30度位まで下がる可能性がある地域です。雪は地下凍結から地面を守ります。雪はまさに地面の布団なのです。また、山に降った雪は山にダムがあるのと同じで、豊富な水資源を確保してくれます。

非常に駆け足でしたが、旭川の気象をみてまいりました。このように気象を理解していただいて生活

に役立つことが非常に大切なことだとおもいます。  
司会 森田

今井道子先生です。お医者さんであって世界的な登山家でもあります。現在は、母校の東京女子医科大学付属病院腎総合医療センター泌尿器科で非常勤講師をされています。と同時に文部省保健体育審議会の委員を勤めるなど幅広く活躍されています。なかでも登山家としてのご活躍は国際的にも広く知られています。先生には、山の寒さ、そしてそれを一層厳しくしています風について、お話していただけるかと思います。



### 講演Ⅲ 今井 “風もいい子のときが”

風というと、吹かない方がいいと思いがちですが、私は自然の中にあるものは全て人間にとって恩恵だと思っています。人間は文明のエネルギーを次から次へ作り出します。大気汚染もその一つです。都会の大気汚染は、風が吹けば一時的に減らしてくれます。自分のところで出した大気汚染は、ヒマラヤにぶつかった風がちゃんと運んでいってくれるからです。しかし、最近のお隣の中国では開発が進んで、大気汚染ばかりでなく酸性雨まで日本に運んできてしまう。酸性雨というのは、pHが5.3以下を言いますが、沖縄、九州では4.2位、東京で4.8、北海道では5.1位でしょうか。でも、本当は自然の風はいい子なのです。だけど、文明が作った何かを乗っけてきた風はいい子じゃないかもしれないけれど、それは風のせいじゃなく人間のせいなのです。自然界の風はやっぱりいつも私たちにとって味方なのです。私が知っている風にまつわる自然界でのエピソードをお話します。ヒマラヤにチョモランマという山があります。この世界最高峰に、最も寒い冬に、最も厳しいルートの北壁を登りに1983年と1985年の2回行きました。1回目は、8100mで風に追い返されてしまいました。2回目も8455mで風と岩雪崩で断念

しました。人間というのは、風速33mで飛ばされるんです。それで、風速40mに対処するため、東大の宇宙研の風洞実験室で実験していったのです。自然っていうのは本当に不思議なことが多いですね。風速30~40mのところを歩くんですが、5000mだと気圧が低いのでスピードは速いんだけど力がない風が来るから、歩けるんですね。8000m位になりますと、風速は70m位、気温は-60度位になります。寒暖計は-40度迄しか測れません。このように、ずーっと山を登ってきて、ヒマラヤまで行って、もうこれ以上の風はないだろう、これ以上の寒さはないだろうと過信していました。1987年、パラグライダーを始めました。まだ、日本にパラグライダーがない頃です。山の風全部知っているから大丈夫だと思っていました。ところが、5m飛び出したら、ここの風がどういう風なのか全然わからないんです。教えてくれる教師がいない。教師は誰かどうと鳥が一番、鳥の飛ぶ姿をみると風の様子がわかるんです。

私は、本当に自然界というのは、全てが人間にとって恩恵だと思っています。黒島先生が生理学的に寒さのある限り人間は生き続けると言われましたけど、私は、自然の中の風とか寒さとかすべてのものが、常に人間の勉強をしたいという欲望、何か新しいものを知りたいという未知への興味みたいなもの、人間を飽きさせずに一生を過ごさせてくれるものだと思います。皆さんも是非、風を嫌がらないでいただきたいと思っています。

### 司会 森田

次は、居住性ということでお話していただきます。魚住麗子先生です。先生は現在、光塩女子短期大学教授で、北海道総合開発委員などの要職に就かれておりまして、「北国の住宅」など多くの著書がありになる寒冷地建築の専門家です。



### 講演Ⅳ 魚住 “家は家族の絆のために”

住宅の『断熱性と換気性』は、北海道の住宅、寒地住宅、のキーワードです。断熱と気密、気密によって換気が必要になってくる訳で、このふたつがこ

れからの北海道の住宅で特に取り上げていく点になるだろうと思われまます。

昭和28年、『換気住宅建設等促進法』ができ、ブロックとかレンガとかセラミックなどで建築しなければ住宅金融公庫のお金が借りられないようになり、公営住宅等もそのような建材で建てられるようになりました。また、二重窓にしなさいということで、一気に二重窓が普及し、北海道の住宅がよくなっていく出発点になったと思います。その後、結露の問題等があり44年に改正になり、木造でも断熱材を入れればお金を貸すようになりました。当時は、札幌で30mm、旭川で50mm以上の断熱材を壁や天井等に入れることが条件でした。平成2年北海道を対象に北方型住宅の基準が出され、従来の断熱材であれば全道一円に140mmになりました。窓は、三重に相当する窓、玄関は断熱戸とか断熱玄関ドアと呼ばれるものを使用しないと借りられないようになってきました。このように法律がどんどん変わり、新しい時代に入ってきていると思います。

平成2年の改正で『高断熱』『高气密』というキーワードがでてきております。隙間にいくら断熱材をいれても、どこからか抜けていってしまう。気密性を考えた住宅を建てようということです。旭川でも、冬部屋の中の温度を20度位にして、床と天井の温度差が3度か4度にすれば寒さを感じない、そういうものを目指そうということです。しかし、部屋の中では人が住み、台所では炊事をするので空気が汚れます。気密性をよくすると同時に計画的に換気を考えなくてはいけません。断熱と気密と換気と暖房、この4つを相対的に考える事が大切ですが、機械の力で自動化すると停電したとき心配です。それに対する対応をちゃんと考えた上で建てる事が大切です。

かつては勤め先が暖かいし快適だから、家で仕事をするよりも職場で仕事をしたほうが良いという人が大勢いました。家の造りがしっかりして、家に帰る魅力がありますと家族の絆も一層強くなるでしょう。わが家に帰る楽しみ、あ一家に帰ったらほっとするようになりますと、旭川のような寒さがきびしく冬家にいる時間が多いところでは、家造りをしっかりして特に冬の生活を快適にしていきたいと思っております。

司会 森田

最後に、今日のフォーラムのまとめを、もう一度黒島先生にお願いいたします。

黒島

私は、寒さが体の働きにとってどのような意味をもっているのか、ということについて説明させていただきました。菊地さんには、旭川の気象の特徴、特に、寒さと風について豊富なデータを見せていただき、旭川の生活環境としての気候というものについてお教えいただきました。今井さんには、特に寒さと密接な関係にある風について、普段私たちが経験できない極限的な貴重な体験をお話していただきました。魚住さんには寒さの中での生活の場としての建築のあり方について、特に大切な断熱性、換気性そして家庭の団らんと関わりについてもお話いただきました。今日のフォーラムの結論として、すでにお話をしましたように寒さはビタミン剤のようなものだと思います。一定量は必須ですが、足りなくても、とりすぎても障害がでできます。今日のフォーラムから、寒さをビタミンと考えることで、これからの生活の中で寒さを活用しエンジョイしていく方針を自分たちで創り出すことができるのではないかと思います。「文化は北方から」「光は北から」「文化文明が栄えるのは寒いところである」と言った先人の言葉はよき寒さに恵まれることではじめて生きてくることを今日のフォーラムから再認識して頂けたのではないのでしょうか。

司会 森田

今日のこのフォーラムの中で、皆さん、ますます自分の住んでいる旭川という街が好きになられたのではないのでしょうか。旭川に来る度に厳寒の雪の中の温かさというものを感じておりましたが、その理由が解ったような気がいたします。と同時に、旭川の街の方々の心温まる温もり、そういったものが旭川というところを素敵にしているんだなど、感じております。今日、久しぶりに旭川に参りまして、とても素敵な時間を過ごさせていただきました。今日のこのフォーラムが皆様にとっても、思い出に残るものであればと心より願っております。どうもありがとうございました。





## 開学20周年に思う「20年ふた昔」

生化学第一講座 教授 藤澤 仁

旭川医科大学創設準備室の人や山田初代学長につれられて粘土の原っぱにぼつんと建てられかけていた一般教育の建物を見に来たのは1973年（昭和48年）の夏のことであった。原っぱの向こうに上川神社の森が見えた。大学の近くにニュータウンが建設されるので分譲地を申し込んでおくとよいと山田先生に勧められたが、そこは見渡す限り木も殆ど生えていない粘土であった。その1カ月ほど前に旭川医大が発足するから早く帰国するようにとの連絡を受けて米国から急ぎ帰国していた私は、なかなか法案が国会を通らず大学が発足しないのにいらしながら京都で暑い夏を過ごしてきたが、旭川も京都に劣らず暑く、千歳から国鉄で着いた旭川の駅前には埃がいっぱいいて古ぼけた建物があるばかりのいかにも日本の北の果ての風情であった。9月末になってやっと開学、住まいは神楽岡の借り上げ住宅、研究設備もジャーナルもない研究室が市立病院の一室、教授会は教育大学、車で行ったり来たりするだけの毎日だった。あれから20年、一期生が何人か教授になり、二期生の教授も生まれんとしている。駅前はずいぶん綺麗な理想的な中型都市の玄関口となり、大学の周りはいよいよ理想的なニュータウンになった。山田初代学長のお勧めに従って手に入れた分譲地に建てた私の家から大学の研究室は、エレベーターを待つ時間が多少あったとしても徒歩3分の距離にある。8階の私の部屋からは大雪山の山々の素晴らしい眺望が窓いっぱいに広がる。訪問客を駅から車で上川神社の前を通り抜け、神社の森の横の並木のトンネルとなった大通りを医大まで連れてくると誰もが感嘆の声を上げる。

旭川医大での研究はそれまで盛んだった酵素の反応機構の研究や代謝経路の研究でなく、細胞機能の調節を司るものの研究を、とりあえず細胞機能の調節に直接関与する重要な物質の合成の制御機構について調べることにした。重要そうな物質としては、ドーパミンやアドレナリンなどのカテコールアミン、セロトニン、ポリアミンなどが当時としては普通に思い浮かぶものであった。そこでそれぞれカテコールアミン合成、セロトニン合成、ポリアミン合成の律速酵素であるチロシン水酸化酵素、トリプトファ

ン水酸化酵素、オルニチン脱炭酸酵素などをラットの副腎髄質、脳、肝臓から精製しそれらの活性制御機構について調べ始めたが、優秀な研究スタッフに恵まれどの研究も大当たりし、当時幾つもの国際学会から招待講演の依頼を受けた。一期生の優秀な学生諸君が何人も私達の研究に参加してくれたのも私達の研究の推進の大きな力になった。当時教室のスタッフ同様の活躍をした諸君は今本学や他の大学の講師や教授となって活躍している。こうして研究を進めるうちに私達はカルシウム/カルモデュリン依存性蛋白質燐酸化酵素Ⅱと命名した酵素をラットの脳の中に見つけた。この酵素は神経伝達物質の分泌や合成などの脳の基本的な機能から、記憶などの脳の高次の機能に至るまで多彩な細胞機能の調節に関与する重要な酵素であったので、そのあとは聴くも涙、語るも地獄の主として米国の多数の研究グループとの激しい競争に巻き込まれて今に至っている。当初、酵素の取り扱いに関しては職人的な技術を誇っていた私達のグループも、今はラットの脳の酵素もヒトのTリンパ球の酵素もそれらの遺伝子を大腸菌や昆虫細胞に導入して多量に手に入れて研究を進めるように様変わりし、職人的技術も以前ほど要求されなくなった。遺伝子工学の技術が一般化するに従って、研究者は実験用キットを使い、実験器具を平気で使い捨て、機械の整備に無頓着になった。

20年前の旭川医大のこの丘は粘土の原っぱだったが、池があり山椒魚がいて雁のつがいが住んでいた。野鳥の群がいて、鳥の巣が幾つもあった、野ネズミやキタキツネが何匹も住んでいた。山田初代学長の理想主義にみんなが賛同し、教官も事務官も学生も建学の熱気に満ちてみんなが一生懸命だった。ごみ捨て場から拾ってきた瓶に緩衝液を入れ、ピーカーやメスシリンダーは何度も修理して使っていたが、我々の研究は世界をリードしていると自負していた。20年ふた昔、旭川医大は変わり、旭川が変わり、日本も変わり、世界も変わった。そこに住む人々も変わった。パフォーマンスばかりが目立つ時代に、地道に学問を追求することは20年前より確かにむづかしくなっている。





## 開学20周年に思う一道北の脳神経外科

脳神経外科学講座 教授 米 増 祐 吉

脳神経外科学講座は学年進行で最後に開講されたのが本学開学に遅れること3年6か月後の昭和52年4月であった。文部省の当初の設置計画から削除されていたのを関係各位のご努力により復活開設されたという経緯がある。従って開学当初の多くの困難に関係していないので頭記の表題での話をするのは必ずしも適任でないとおもわれるが、道北の医師不足の改善は脳神経外科としても重要な課題であり、辿ってきた道に種々の感慨がない訳ではない。

開学当時の道北の脳神経外科の実働施設として旭川赤十字病院がほとんど唯一の施設であった。この広大な地域に発生する、殊に救急を要する患者の診療には極めて不十分な状態で、多くの救命可能な人々が不幸な結果に終わっていたことは言うまでもないことであった。

開学の課題は脳神経外科では更に重要な意味を持っていた訳である。

脳神経外科醫を育てることは勿論、まず学生教育の段階で医師としての基本的な常識としての脳神経外科の認識をどのように教育するかがまず問題になる。いわゆる学問としてではなく、実学としての脳神経外科を基本とする教育を展開したつもりである。知識を記憶するのではなく、何故か、何のためかを考えると言う *problem* あるいは *patient oriented* の *problem solving education* と言うことを常に意識すると言う医学教育改革の課題への *approach* を臨床実習での討論中心の教育と言う形で目ざしてきた。

勿論脳科学の深みは昨今欧米のみならず日本でも *the decade of the brain* (脳の十年) と言う *project* が進められていることでも分かるように生命の科学と共に人間の本质に迫る問題が未解決のまま残されている訳であるが、その窓口の一つとしての脳神経外科の認識と言う所まではなかなか近づくない悩みがあることも事実である。

卒後教育としては道北地域の必要を満たす立ち立ちできる脳神経外科醫の育成を目指し、結果としては脳神経外科全般に通じる医師の育成が必須となり、昨今の傾向である *subspeciality* への展開に遅れを

取る傾向にある面も否定できない。

講座開設以来15年を経て、40人の卒業生の参加を得て、そのうち19人は脳神経外科学会の専門医の資格をとり、学位取得者もその半数近く、道北の脳神経外科醫の不足をなんとか解決できる状態に近ずき、更に道全体にわたって活動している状態はまずは課題の第一段階は成就したと言える。

しかし一方では講座の研究活動の充実と更には既設の道北地方の脳神経外科施設の充実と道全体にわたっての脳神経外科醫の要求には応じ切れない状態で、更なる努力が必要な状態である。また脳神経疾患の診断治療技術の高度の進歩に伴って対象疾患の拡大、治療技術の専門化が要求され、*subspeciality* の拡大充実が今後の課題として残されている。

最近では更に医療の究極の課題である予防医学への発展も見逃せないものとして追及していかねばならない。今後の発展は各個人の現場での努力に待たねばならない。

卒前教育の成果としてはなかなか評価し難いが、卒後教育の場で旧態依然の状態になっていると言う危惧はある。数少ない接触ではあるが納得のいく対応に逢うこともあるが残念ながら教育と言うものの難しさを痛感させられることも少なくない。

21世紀に向かって、何事につけても国際化が叫ばれているが、まずは足元をしっかりと固めることが肝要であろう。しかし国際化への展望を考えると、我が医大の卒業生が卒前教育で外国人教師に教わっていることが信じられない状況に遭遇することも少なくない。せめて専門用語だけでも身につけてほしいと思う。学生時代からそのような展望を持ち機会を十分に生かして頂きたいものである。

20年と言えば人間では成人である。各個人が個人としての自覚を要求される年齢である。各個人の自覚による努力の積み重ねが旭川医科大学の今後の発展につながり社会の変革、医療改革など先行不確かな時代に、旭川医科大学を揺るぎないものとして確立することになるであろう。





## 開学20周年に思う—20年を振り返る

化学教授 内田 倅 喜

「時は流れず、積み重なる」と言うが、この20年を振り返ると大変重く感じられる。60才を越えると「この外に何かなかったのか」と想うこともしばしばである。幾つかあるなかで、3つの点を取り上げ振り返ってみることとする。

カリキュラムが変わった。最初に学生が当面するのは勿論一般教育であり、又医学の専門教育の方はそれ程考え方の変化がない。開学当初は北大教養部のカリキュラムの真似事でお茶を濁したが、やはり独自のものと言うことで4人の教授からなる小委員会が発足した。当時楔形教育とよく言われ、現在はその功罪も知られたが、何がなんでも楔形と言う考えがあった。当時の新カリキュラムは51年度入学学生（4期生）から完全実施され、それ以前の入学学生は“見なし”によって順次新カリキュラムに移行した。勿論、幾度かの手直しによって、楔形ではなくブロック形となった訳である。それも今や旧カリキュラムとなり、現在は平成2年度入学学生（18期生）から実施された新々カリキュラムが進行し、手直し中である。カリキュラム改正時に常に思うのだが、実に不毛の議論を重ね、無駄な時間を費やすものである。

入試制度も随分と変わった。開学以来6年間は二期校時代とも言えようか、毎年1,000人を越す受験生を迎え、出題も大量、短期採点に都合よく作られたものである。市内高校を受験場として借り上げ、本学体育館も使用された。入試も採点も戦争のような感じで遂行されたものである。

ついで、新聞紙上などでの多数の反対論があったのをおさえて強行され、迎えたのは共通一次時代と言えよう。3倍の足切り、面接及び小論文と言う言葉も盛んに使われた。この発想は現在も続いているが、当時反対を唱えた人々はどうなったのであろう。どんな反対論を唱えても数年経つと忘れてしまうのが日本人及びその社会の特徴ではあるのだが不思議である。この制度で取り上げるべき点は受験生が国立大学を1校しか受験出来なかったことである。よくよく考えて受験校を選ぶ必要があった。大学としても360人以内（定員の3倍を越えることはなかった）の受験生を対象とすればよいのだから、第2試

験場も必要とせず、体育館も使用しなくなった。ただ、共通一次試験を実施しなければならないので、出題、採点の必要はないが、入試実施体制を2度組むことになる。もう1つの特徴は二次試験から英語をはずしたので、英語の嫌いな、又は英語の出来ない学生を集める結果となった。英語は入学してから勉強させればよいと主張していたある臨床の教授は当該学生が5、6年或は研修医となった時愕然としていたことを思い出す。

続いて、A、B連続時代である。勿論、入試センター試験が行われているので、前制度の手直しと言えるであろう。当時盛んに言われたことは受験機会の複数化と言うことであった。しかし、見方を変えれば、幾つ大学を受験しても優秀な学生はその全部に合格し、優秀ならざる学生は全部に不合格となることである。国は受験料を稼ぐことが出来る。労働過重を強いられる現場は見返りとして優秀な学生を獲得出来る訳ではなかった。受験生の輪切りが進行し、その質は大学の受験界におけるランクに左右される結果となった。

現在は分離分割時代である。定員を2分して前期と後期の2度入試をすることである。センター試験と併せて入試実施体制を3回組まなくてはならない。その見返りとして前期では本学を第1志望とする優秀な学生を獲得したいと言う願望がある。果たしてそこに、勉学の意欲と学力においてかつてのような夢をもてるかどうか実験中である。

変わったことのもう1つは学生である。初期の学生達は「我々も大学を創造している」と意識していたようである。勉学意欲もあり、プライドもあった。一方、いまは自動販売機から罐ジュースを買うような態度で教育を受ける学生が多いように見える。そして、その空罐は整理せず、その辺に放り出しておく。変な学生を縄でくくって、百叩き、打ち首獄門にしたいと感じるのはもう古く、出来れば淡々と退学処分にして、決して心を痛めないよう修行すべきなのかも知れない。だが、私にとってもうその修行の時間は残されていない。

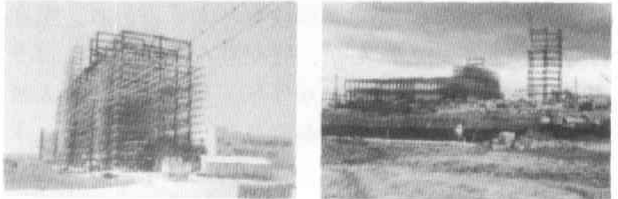
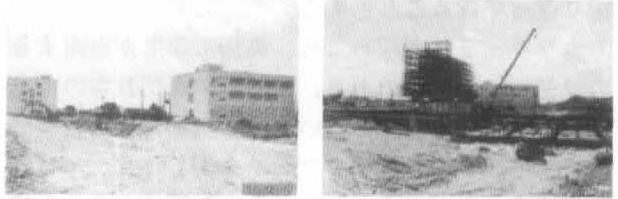
# 創設期の旭川医科大学



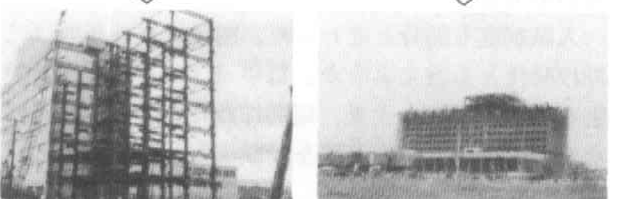
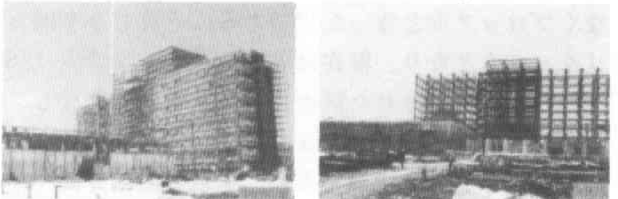
第1回入学式



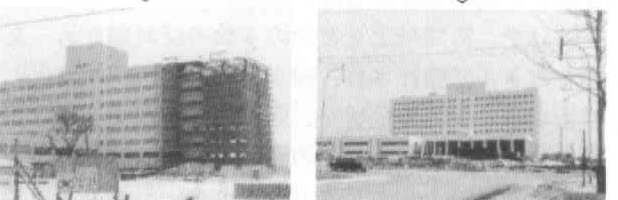
起工式 48年5月



仮校舎



仮校舎における入試合格者発表風景

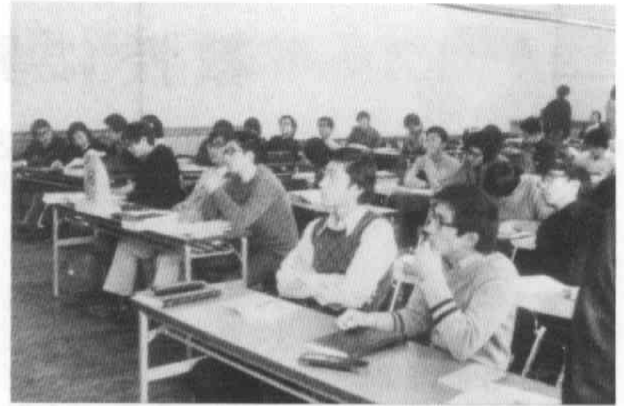


基礎臨床研究棟

医学部附属病棟



旭川医大 航空写真 50年5月



仮校舎における授業風景

## 旭川医科大学開学20周年記念関連行事

### 1. 記念式典、祝賀会

本学は、昭和48年9月に設置されて以来、今年で20周年を迎え、11月5日に旭川市内のニュー北海ホテルで旭川医科大学開学20周年記念式典と祝賀会を開催し“成人”を祝いました。

式典には、学内外関係者約300名が出席、清水学長が式辞を述べた後、文部大臣の祝辞を医学教育課長が代読、来賓が祝辞を述べ、祝電が披露された。引き続き祝賀会が開かれ清水学長の感謝の挨拶後、北見工業大学長らが祝辞を述べ、山田参与の発声で乾杯、下田前学長及び同窓会会長の吉田教授のスピーチに続き、“旭川医科大学同窓会歌”の初披露など杯を交わし、20年を振り返り、黒田元学長の万歳三唱の発声で盛会裡のうちに終了しました。

又、11月10日には学内祝賀パーティーを学生食堂で行い、学生、教職員約200人が出席し、歓談の輪を広げました。  
(庶務課)

### 2. 記念フォーラム

11月5日午後1時より、本年度新装なった大雪クリスタルホール音楽堂を会場に記念フォーラムを開催致しました。本フォーラムは、“寒さと暮らし—「快適」旭川—”を主テーマとし、医学、気象、住宅などについて4人の専門家の方々に講演をお願いしました。

当日は、当初の予想を上回る約750名もの市民の皆様がご来場下さり、会場の収容人員数(600名)を越えてしまったため、ロビーのモニターでお聞きいただくハプニングもありました。  
(学生課)

### 3. 記念写真集

旭川医科大学同窓会が中心となって現在編集集中です。

### 4. 記念植樹を行う予定です。



附属図書館



記念祝賀会



学内パーティ



# 教授に昇任して

—第二の故郷となる旭川の地で—

放射線医学講座 油野 民雄

平成5年3月末にご退官されました初代教授天羽一夫先生の後任として、平成5年9月1日付けで北陸の地、石川県金沢より赴任してまいりました。天羽先生が築いてこられました旭川医科大学放射線医学教室の今後を担当させていただくことになりましたことを大変光栄に思いますと共に、その責任の重さを痛感している次第です。

私は、石川県金沢市の近郊（石川県は加賀と能登の二地区に大別されるがJR金沢駅より七尾線で約30分能登寄りの所）で生まれ、昭和41年に地元の金沢大学医学部に入学し、昭和47年に卒業、卒業と同時に同医学部医局に入局したために、過去2回のアメリカ留学の機会を除いて、一貫して石川県で生活してまいりました。したがって旭川医科大学勤務により、今回、石川県以外での初めての生活基盤を旭川で築くことになりました。

この旭川へ赴任しましてから約90日（11月末現在）が経過しましたが、広大な美しい自然およびそこに生活する純朴な親しみ深い人々に囲まれ、金沢とまた違った、私の第二の故郷となるこの地の良さを認識したところです。

私のこれまでの経歴と今後の抱負を記すことで、教授就任のご挨拶に替えさせていただきます。

私は昭和47年3月金沢大学医学部卒業と同時に故平松博教授主催の金沢大学医学部放射線医学講座に入局し、放射線医学の研修を行う傍ら、現金沢大学核医学講座久田欣一教授（当時助教授）の下で核医学の研究に携わりました。翌年の昭和48年に全国の国立大学に先駆けて核医学が放射線医学講座より分離し独立講座として発足（その後、金沢大学では放射線医学の主要3分野である放射線診断学、核医学、放射線治療学のうち、放射線診断学および治療学は放射線医学講座が担当し、核医学は核医学講座が担当）の際は、久田教授に従い核医学講座に移動し、以来今日に至るまで主として核医学の診療、教育、研究に従事してまいりました。

私の研究は臨床を主体にしたものですが、そのなかでも肝、胆道、消化管、腎の腹部領域、および炎症、骨髄における機能的見地からの核医学画像診断を中心に行ってまいりました。また昭和55年のニュ

ーヨーク州立大学および昭和58年のエール大学と計2回の米国留学経験を通じて、放射性同位元素を用いた実験技術の取得に努めました。

核医学画像診断の特徴は、目的対象とする臓器または組織の中にその有する機能が反映された画像が得られることであり、純形態的画像が得られるX線CT、超音波、MRI診断との大きな相違でもあります。またその評価のアプローチも、従来の生理的様相を主体としたアプローチに加え、代謝状態、レセプタ分布状態など、多岐にわたるようになってまいりました。必ずしも適当な例えではありませんが、“顔かたちが整っているかないかなど人間の外面的な面（形態）を詳細に評価する点ではX線CT、超音波、MRIに劣るが、その人間の持つ心、性格など内面的な点（機能）を明らかにとらえることができるのが核医学である”と、この旭川の地でも金沢の場合と同様、ポリクリ等の講義の機会をとらえて、学生に核医学の特徴を説明しております。

この旭川の地では前任地の金沢大学と異なり、全国の他の大学と同様に一講座で放射線診断、治療、核医学の三部門を全て担当することになります。現在放射線医学は、他の臨床医学と同様に、そのカバーすべき領域が急速に拡大する共に、それぞれの部門の奥行きも益々深くなっております。したがって、私を含めて総勢7名の教室の現有勢力だけで全領域を網羅するには、自ずから限界がみえてまいります。しかしながら、放射線医学講座の健全な発展のためには、3部門それぞれの調和のとれた発展が不可欠であります。そのためにも、今後教員の大規模な増加と共にこれら三各部門毎の教室の若い力を育む必要性を痛感しております。

以上、初代天羽教授の開講以来の教室の指針である放射線科医の少ない道北地域の放射線診療の拠点としての役割を更に押し進めることを目標に、放射線医学教室の更なる発展と共に、若い気鋭の放射線専門医の大規模な育成をめざすことが私の責務と考えております。そのために微力ではございますが、一步一步地道に努力を積み重ねていきたいと考えておりますので、関係各位の皆様方のご支援、ならびにご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願いいたします。



## 助教授に昇任して

■ 精神医学講座 ■

千葉 茂



この度、宮岸 勉教授のご高配により精神医学講座助教授に就任いたしました。その責任の重さに身のひきしまる思いが致します。

皆様ご存知のように、旭川医大は本年11月で開学20周年を迎えました。私は本学の一期生として昭和48年に入学致しましたので、今は無き仮校舎（旭川教育大学附属小学校旧校舎）で半年間学びましたし、また、雑草が生い茂る「大学建設予定地」が現在の威風堂々たるキャンパスに変貌するプロセスをじかに見てまいりました。一期生は苦勞が多かったのではないかと思われがちですが、山田守英初代学長をはじめ多くの教官ならびに事務職員の皆様が大学の成長発展に尽瘁なさる姿を拝見できたことは、我々一期生にとって貴重な経験でした。また、このような体験を通してフロンティア精神を学ばせていただいたことに感謝致しております。

本学卒業後、私はただちに精神医学講座に入局し、また、これと同時に設置された大学院に進学致しました。この頃から、私はとくに脳波学的研究に興味を抱くようになり、大学院ではその一環としてepilepsyの病因に関する研究を行わせていただきました。また、昨年6月から本年3月まで、epilepsyの研究で世界をリードしてきたカナダのバンクーバーにあるプリティッシュコロンビア大学医学部キンズメン神経研究所（Juhn A. Wada 教授）に留学する機会に恵まれ、今後の研究を進める上で大きな収穫を得ることが出来ました。このような機会を与えて下さいました宮岸教授をはじめ諸先生に心から感謝を申し上げます。

精神医学は、人間の精神的側面を対象とする医学の一分野です。しかし、医学を身体医学と精神医学とに大別する時、医学の二大分野のひとつとしての重みを有していると存じます。今後も諸先輩の教えを忘れることなく、新進気鋭の卒業生とともに研究・教育・診療に鋭意努力する所存でございますので、何卒よろしくご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。

（精神医学講座 助教授）

## 助教授に昇任して

■ 内科学第一講座 ■

山下 裕久



11月1日、本学20年の勤務で助教授になりました。病院開院の昭和51年11月1日もみぞれまじりで、若輩病棟医長として、4名の病棟担当医に新人看護婦さんを混え、

8階病棟で迎えたことを懐かしく思い出しました。

私は昭和45年に北海道大学医学部を卒業し、半年を麻酔科で研修し、市中病院で内・外科を経験した後、北大第一内科に入りました。当時はインターン制度がなくなった直後ですが、それに近い経験をしたこととなります。当時第一内科を主宰されていた村尾教授は専門は呼吸器ですが、学位は神経反射でとられたとかで、広い視野で指導と助言をいただきました。小野寺先生は助教授で循環器を担当され、何事もきちんとされるのが評判でした。私は入局当初を呼吸器で研修し、遅れて循環器の勉強に入りましたが、お二人や諸先輩から呼吸器・循環器の手ほどきを受けたのが現在の基礎といえます。

昭和49年に小野寺初代教授のお誘いを受け、当初は卒業生が自立するまでの7、8年をお手伝いするつもりでしたが、昭和54年の冠動脈造影装置の導入に伴い、虚血性心疾患の診断と治療を主体に仕事を進めてきました。近年この分野は、新しい治療法と機材の開発もあり急速な進展をとげています。しかし、昨春は、前夜に談笑していた岳父の急性心筋梗塞死にみまわれ、あらためてこの種の疾患をあつかう難しさを思い知らされました。

臨床の合間を縫っての研究は、呼吸循環の接点である肺循環と心機能を主に、手作りの実験系で医局の仲間と行ってきましたが、一部は主要誌にも採用されました。これらは彼らの頑張りの賜であり、本学の力量向上を示すものと喜んでいきます。

当教室は、昨夏、第2代教授として菊池健次郎先生が就任され、心疾患・高血圧・腎疾患・呼吸器・脳血管障害・神経を含む広い領域を視野としています。幸い教室には数多くの人材がおり、臨床と研究の双方で頑張っています。私の役割は教授の手助けをし、これらの人たちに、のびのびと活躍してもらう場をつくることと考えています。皆様のご助言ご助力をお願い致します。

（内科学第一講座 助教授）



## 卒業後10年に思うこと

スズ タニ  
第5期生 錫谷 達夫  
(細菌学講座 助手)

今から11年前。臨床実習も終わろうとしていた頃。いつの時代の医学生もそうであるように、我々も顔を合わすと決まって進路の話に花を咲かせていた。皆それぞれに迷っていたと思うが、私もその例外ではなかった。研究者に成りたいという夢は持っていたものの、一体全体自分にその才能があるか否か皆目見当がつかなかった。また、正直言うと、医学部を卒業し皆が医者になる中、自分だけが医者をやらないことに一抹の寂しさもあった。あれこれ思い悩んだあげく、昼は医者、夜は研究者という2足のワラジを履く自信がないという消極的な理由で、基礎医学の道を選び、細菌学の大学院に進んだ。

あれから10年。基礎で研究を続けるということは気楽なようでいて、はたから見るとははずっと精神的にきびしい仕事である。特に研究を始めたばかりの大学院生時代は、働いても働いてもデータの出ない日々が続き、途方に暮れたものであった。それでも10年この仕事を続けられたのは、教室の先生達のお力添えによるものであることは言うまでもないが、よそに勉強に出して頂いた経験も大きな励みとなった。

卒業1年目。「医学部で微生物学を研究するからには、自分の目で感染症の患者さんを診ておきたい。」というわがままを東教授に話したところ、快く聞き入れてくださり、小児科で研修出来るよう取り計らってくださった。わずか1年ではあったが、仕事に対する根性をたたき込んでいただけたことは私にとって大きな財産となった。多くの教訓を与えてくださった患者さん、そして将来小児科医にはならないであろうことが解っていたにも関わらず、他の同期生達とわけへだてなく教育してくださった小児科の先生達には深く感謝している。

そして大学院2年目から、細菌学でヘルペスウイルスの研究を始めることとなった。しかし、本の上での知識しかない医学部出身者にとって、いかに研究を進めるかということとはもとより、テーマを決めることさえできず、日々悶々と過ごしていた。その頃、北大薬学部・薬品有機化学講座に勉強にいく機

会がめぐってきた。ここでの1週間は私にとってカルチャーショックの連続であった。私と同年代の人達がどんどん自分の力で研究を進めている姿を見て、知らず知らずのうちに自分の中に住み着いていた医者というプライド、そしてそれが実力を伴わない奢りであったことをいやと言うほど思い知らされた。それからは、とにかく研究者になるために1から始めようという覚悟が出来、吹っ切れたように思う。

そして何とか大学院を修了、細菌学の助手となり、ロンドンの研究所へ3年間留学させていただくことが出来た。そこで世界の最先端をいく研究を自分の目で見る事が出来たことは大きなプラスとなっている。

こうしてこの10年を自分なりに振り返ってみて、大変恵まれた10年ではなかったかと多くの人々に感謝している。そして改めて、「井の中の蛙になってはいけない」と感じた。旭川医大の学生は、単科大学であるということ、そしてその立地条件のため、自分達と毛色の違う人と付き合う機会が少ないように思う。これは我々にとって大きなハンディーで、いつも意識して外に外にと目を向ける努力をしなければと痛感している。

最後に、この文章を読んだ学生の皆さんに基礎を毛嫌いされないようつけ加えておく。研究は麻薬のようなもので、最初は何の快感も得られないが、続ければ続けるほど止められなくなるものであること。だからこそ飽きっぽい性格の私が10年も続けてこられたのだということを……………





## 10年目に思うこと

第5期生 伴 俊 明  
(国保国吉病院内科)

現在勤務している病院で年末に駅伝大会があり、日常走る機会の全く無い私も、大学時代に距離スキーをやっていたという実績を買われそのメンバーとなっている。個人競技ならともかく駅伝では皆の手前歩くわけにもいかず、勤務終了後真暗い中で少し練習を始めた。久し振りに取り出したランニングシューズにはマジックで「旭医」と書いてあり、ずいぶん物持ちが良いと感心したが、使用が年に1~2度では当然かもしれない。そんな時に旭川の同級生から電話があり、卒後10年になるので何か書いてくれとの事であった。昭和から平成になり単純に引き算ができない事もあってか、日常の中で特に意識する事がなかったが、このランニングシューズをはいて、神楽岡を走った日々から既に10年が経つのである。医師に成りたての頃は10年上の先輩といえど何でもできる神様のようにみえたものだが、現在の私はどうであろうかと考えると赤面の思いである。

アッという間に過ぎた感のある10年間だが、振り返ってみると医師としての基礎作りの期間だったといえる。

卒後の大学病院での2年間の研修、続く関連病院での2年間の勤務、この4年間を私の所属する千葉大学第2内科では初期研修と位置付けている。大学での2年間は3ヶ月あるいは6ヶ月単位で各内科の各グループをローテーションした。私も血液、呼吸器、消化器、腎臓、循環器、内分泌・代謝、そしてアレルギー・膠原病の各グループを回った。それぞれは短期間であり各疾患の“さわり”を学ぶのが精一杯であったが、何よりも貴重だった事は各々の専門家と面識を得た事である。後々こまった事、不明な事があった時これら専門家に気軽に相談できる事は、自分の医療の幅を広げるのはもちろん、その患者さんにとっても大変利益になる事である。最近専門分化の著しい内科であるが、己のできる事とできない事ははっきり認識し、できない事についてはすみやかにその専門家に相談あるいは紹介するシステムを持つ事が一内科医としては極めて重要な責務であると思われる。

初期研修の後半の2年は国立柏病院に勤務した。現在は統合されガンセンター東病院となっているが、私のいた頃は市民病院的性格を持った一般病院で、それこそ様々な患者さんを診察し、治療する毎日であった。先輩の助言・指導を受けながらの勤務であるが、主治医として外来・入院の患者さんに接する場合には最終的な全責任を主治医たる自分が持つ事になる。その責任の重大さとそこに見いだせる喜びを強裂に自覚させられたのがこの時期の研修であった。

初期研修終了後の3年間は大学に戻り、内分泌研究室に所属し専門の臨床を学び、コレステロールの細胞内転送蛋白についての研究を行った。臨床をし研究を続ける事はなかなか難しく、よき指導者、そして苦勞を共にする仲間がいてはじめて可能となるように思われる。私の場合幸い両者にめぐまれ、何とか継続できた感がある。

その後の3年間は米国国立衛生研究所(NIH)に留学する機会をいただき、Kohn博士のもとでTSHレセプターの研究を行った。アメリカの研究生活で感心した事の一つは、研究者間の交流が非常に盛んでかつ実際的である点である。電話一本で最新の情報・技術を交換し、直ちに自分の研究に応用していく事は最先端の研究をしていく上で不可欠であるが、これが非常にスムーズにかつ効率的に行なわれている。日本が学ぶべき事の1つであろう。

こうして振り返ってみると、どの時期、どの場所でも常に周りの人々に助けられ、教えられて歩んできた10年間であった。現在後期研修としてこの病院に勤務しており、多少なりとも周りを助け、教えるべき立場であるが、以前として助けられる事の多い日々である。

## 解剖学実習を終えて

第3学年 加藤裕司

解剖実習初日、初めて入る実習室の雰囲気は、一種異様とも思えるような緊張感が漂っており、前日緊張のあまりよく眠れなかった私は、その雰囲気に押し潰されそうであった。他の人の表情は硬く強張っており、他の人から見れば私もそうであったに違いない。そして初めて御遺体に触れた瞬間、緊張は極限に達した。その時の感覚は今でも鮮明に思い出すことができる。

約3ヶ月に渡る解剖実習を通して、私は非常に多くの貴重な経験をした。それらの多くは、解剖実習でしか得られないものであると思う。

その一つは、人体構造を実際に自分の目で見て、理解できることである。大部分の人達と同じように私はヒトの体の中を見るのは初めてであり、目の前に次々と現れる全てのものが新鮮であり、人体構造構築の巧妙さにただ驚くばかりであった。このような驚きは、机上での解剖の勉強では得られなかったものである。また、実習を通して理解できた事柄も多く、机上の勉強の限界及び実習の重要性を痛感させられた。

実習で得た貴重な経験は他にもある。それは御遺体に直接触れ、自分で解剖することにより、人の「生」と「死」について考えさせられたことである。

実習以前に漠然と恐怖に似たようなものを死に対して感じていた。しかし、そのような恐怖心は御遺体に直接触れ、解剖を進めていくうちに小さくなっていき、眼前にある死を客観的に冷静に見つめることができるようになっていった。更に死を見つめることにより、漠然とではあるが「生」の尊さを実感できるようになったのである。

以上述べた様な貴重な経験は、献体してくださった方々の篤志が無ければ、得られなかったことは言うまでもないことである。その貴重な志を忘れることなく、目指す医師になる為に、日々努力していこうと思う。



## 解剖学実習を終えて

第3学年 角谷諭美

6月25日、解剖学実習が終わりました。約2ヶ月半、ほとんど毎日向かいあってきた御遺体をお棺におさめながら実習期間中のことを思い出していました。そして実習がおわり実習室の外へ出ると、それまではりつめていた糸がぶつ切り切れたような気がしました。

実習初日、それまでは想像するだけだった御遺体が目の前に横たわっているというだけで圧倒されてしまい、恐る恐る実習を始めました。回が進むにつれてだんだんと「解剖する、ことには慣れていき、教科書だけではよく理解できなかったことも実際に自分の目で見て、手で解れることによって理解することができたと思います。私はあまり優秀な学生ではありませんが、自分が解剖した部分は、きつとずっと忘れないと思います。しかし、「御遺体を解剖体とみる、ことには慣れることができず、実習中はいつも無理に「ただの物体だ」と考えるようにしたり、班員と話をすることで気をそらしたりして過ごし、その日の大切な所だけ確認したら逃げるように実習室を後にしていました。医学生としては失格かもしれませんが、私が実習に集中しきれなかったことには理由がありました。医大病院に入院していた祖父のことがいつも頭にあったからです。祖母や母らが交代で看病に来ていたので、私は見舞いに行つて話をしたり少し手伝いをする程度でしたが、死にだんだんと近づいていく祖父に朝や昼休みに会い、それから実習をして終えたらまた病院へ行くという生活が続き、毎日気持ちの切り換えが必要でした。6月の初めに祖父が亡くなり、私はその病理解剖を見せてもらいました。先生達はとても親切に説明してくださり、私はここでも一生忘れられない経験をすることができました。

このようなことがあり、私は医学生と遺族の両方の気持ちを持って実習にむかっていました。実習は忙しく、身心共に疲れましたがなんとか無事に終わることができて少し自分に自信が持てた気がします。

合同慰霊祭で読みあげられた祖父の名前を聞きながら、いつも私の勉強のことを心配していた祖父と、私達のために献体してくださった方々のためにも、これからますます頑張っていかなければならないと思いました。



## 研究室紹介

### ■ 麻酔・蘇生学講座 ■ 赤間 保之

麻酔学講座は昭和51年4月、小川秀道教授の就任をもって開設され、同年11月、附属病院の開院とともに手術部における麻酔業務が開始されました。同時にペインクリニックの外来、入院治療も始め、5階東病棟に病床を12床確保し現在に至っています。昨年からは、かねてより文部省に申請していた講座名の変更も許可されて、麻酔・蘇生学講座に、診療科名も麻酔科蘇生科となりました。創設期の人手不足の苦しい時期も教授のもと乗り越え、現在医局員は40名を越えるに至っております。本年4月よりは助教授に久保田宗宏先生が着任され、スタッフの一層の充実がはかられました。

現在、大学には20名が在籍し臨床、研究に従事しております。また、20名を越える医局員が道北地方を中心に12ヶ所の地域の基幹病院の麻酔科で活躍し、多くはペインクリニック外来を開設し、地域住民の疼痛治療にも精力的に取り組んでいます。新入医局員は、大学での初期研修を終了したのち関連病院や、東京、札幌などの救急、集中治療の専門教育研修病院に派遣され、麻酔科蘇生科が中心的役割を期待されている附属病院集中治療部、救急部での活動の準備を行っています。

備を行っています。

研究面においては、成果が直ちに臨床に反映できるものの方針に従い、多彩なテーマと取り組んでいます。研究グループには大学院生を中心とした「薬物の蛋白結合」、高畑助手による「吸入麻酔薬の心機能への影響」、藤本院生による「吸入麻酔薬の腎機能への影響-MRSによる解析」、赤間、玉川両助手による「星状神経節ブロックの脳血流、免疫能への影響」、高田による「水痘帯状疱疹ウイルスの研究」などがあり、成果は内外の学会で逐次報告され注目されています。また中国人留学生も加え、東洋医学や漢方薬の研究も盛んです。

医師過剰時代が取り上げられることが多い中で、麻酔科医は北海道はもちろん全国的にみてもかなりの人手不足です。麻酔科医の仕事は、まだ一般の人々には十分認識されてるとはいえません。その仕事は一見地味ながら、患者さんの呼吸、循環管理など生命に直接関わる重要なものです。さらに、最近では手術術式、ME機器、薬剤の発達により麻酔法も複雑化し、麻酔科医は病態生理、臨床薬理に精通し、素早い判断力と優れた技術が求められるようになってきました。一人でも多くの学生さんが麻酔科に興味をもたれ、一生の仕事として選択されることを強く望みます。(麻酔・蘇生学講座 助手)

## 研究室紹介

### ■ 生物学 ■ 立野 裕幸

昭和60年(かぐらおか第44号)に研究室を紹介して以来、今回が8年ぶりの再登場である。卒業生や2年生以上の学生諸君にとっては生物学教室といえばアフリカツメガエル、チャイニーズハムスター、ウニ、染色体等でおなじみであるらしい。ときどき卒業生がカエルや染色体のことで質問にやってくる。昨年、初代教授の美甘和哉先生が定年退官され、現在は上口勇次郎教授が教室を切り盛りしている。

当教室の研究テーマは開設当初から一貫しており、ヒトで多発している染色体異常のメカニズムを直接配偶子(卵子、精子)レベルで解析しようというものである。特にここ数年間は、ゴールデンハムスター卵子とヒト精子を異種間体外受精させてヒト精子染色体を直接分析する技術を駆使し、ヒト精子における染色体異常の自然発生率、および放射線や化学物質の影響調査を活発に行なっている。また最近では、精子だけでなくヒト卵子の染色体解析にも取り組んでいる。これらの研究成果は国内外の関連分野で高い評価を得ており、美甘先生(現在は伊豆に在住)や上口教授に学会やシンポジウムでの講演依頼が度々きている。また、美甘先生が今年度の日本人

類遺伝学会賞を受賞されたことは、教室員ばかりでなく、これまで当教室で研究に携わった多くの者にとって大きな喜びである。

ヒトの配偶子の染色体研究以外にも、ウシやヒツジ精子の染色体解析、ハムスター卵子の凍結保存、哺乳類卵子DNA修復能の種間差等、旭川医大生物学教室ならではのユニークな研究が行われており、国内外から研修や共同研究の申し入れも相次いでいる。多忙ではあるが、多くの研究者と交流できることは大変嬉しいことである。これら多くの研究成果が講義、実習にも大いに生かされていることは学生諸君がよく知るところであろう。

当教室の研究・教育を支えているのは上口教授を筆頭に、立野講師、渡邊誠二教務職員の研究スタッフ3名とチャイニーズ、ゴールデンの両ハムスターの繁殖と飼育をいってに引き受けている渡辺美江技官(最近ではツパイの飼育にも携わっている)、事務一般、実験器具の洗浄、そして染色体分析にいたるまでスピーディーにこなす小椋山和子補助員、細胞培養から染色体分析、卵子の凍結保存、顕微鏡写真撮影まで正確にこなす堀川陽子(旧姓山本)補助員の計6名である。常に情報の発信基地であり続けようと6人7脚、研究の最前線ががんばっている。(生物学 講師)

## 解剖体慰靈式

平成5年度解剖体慰靈式が、9月22日(水)午後1時30分から本学体育館において執り行われました。

式に参加した御遺族・御来賓・本学教職員・学生は、本学の教育及び学術研究のために尊い御遺体を提供され、医学発展の礎石となられた123名(病理解剖33名、法医解剖59名、系統解剖31名)の方々の御遺徳を偲び御冥福を祈念しました。(庶務課)



## 公開講座

本年度の公開講座は、10月1日から26日の期間に10回にわたり、ニュー北海ホテルを会場に実施されました。

今年は「知っておきたい消化器病のいろいろ」をテーマに、東副学長を実施責任者となり、本学の教官10名が時折ユーモアを交えながらわかりやすく講義しました。

本学の公開講座も8回目を迎え、市民の関心も高く、受講者は終始熱心に講義に聞き入っていました。(学生課)

## 教官の異動

- ※昇任 平山 隆三 5.10.1 整形外科学 助教授
- 山下 裕久 5.11.1 内科学第一 助教授
- ※転出 飛世 克之 5.10.2 内科学第一 助教授
- ※配置換 廣川 博之 5.11.1 眼科学講座 講師



## 窓外

本間 龍也

### 季節外れの採用挨拶

この3月に北海道大学工学研究科博士課程を終了し、4月1日付けを持ちまして講師に採用され旭川の地へやってきました。採用から半年以上もたっていますが、まだ一部の学生としか講義で顔を合わせていませんので、着任の挨拶を兼ね略歴を述べたいと思います。

私は札幌で生まれ、親の転勤で道内を点々とし再び札幌へ舞い戻りました。高校、大学生活を札幌で過ごし昭和63年3月に北海道大学工学部を卒業しました。引き続き大学院に入学しこの3月を持ちまして、博士課程を終了しました。小学校入学以来21年間、学生を職業としていたこととなります。学生の頃(といってもつい半年前のことですが)、「人生の1/3近くも学生で、果たしてこれでいいのだろうか」と不安に思ったこともありましたが、でもむしろ学生で良かったなと感じたことの方がたくさんありました。その1つに、理系の人間である私にできえ山岡

荘八の「徳川家康」を全巻読破したり、吉川英治の「三国志」を丸三日で読破したりできるほど小説を読む時間がたくさんあったことです。ちょうど教養生の頃でしたが、そのころ出会った小説が現在の自分の個性及び思考回路形成に役立っているような気がします。

北大では1、2年が教養で2年後期から学部移行し3年後期まで専門課程の講義があります。4年生になって初めて研究室へ配属され、研究を始めることとなります。私は学部、大学院を通じて高温超伝導体について研究していました。もちろん学位も同じテーマで取りました。このテーマは自分にとってライフワークになるなど感じ、このテーマを自分なりに自由に研究できるポストを探し、本学に来ることになりました。紙面の都合上研究についてはまた次の機会(永久にこないことを望みますが)にでもお話ししたいと思います。

学生の皆さん、まともに物理を勉強してそれで飯を食べるとなるとこれほど難しい学問はないと思います。ただ、教養として身につけるとい点ではこれほどおもしろい学問もまたないと思います。毛嫌いせず、一緒に頑張りましょう。末尾になりましたが、諸先生方、若輩者ではありますが今後とも宜しくお願いします。

(物理学 講師)